

王治本の藝備訪問および地元文人との文藝交流

柴 田 清 継

はじめに

王治本（号漆〔泰〕 圀。一八三五―一九〇八）は少なくとも明治十八年と四十年の二度、藝備地方を訪れている。本稿では、それぞれの訪問時の地元文人との文藝交流の様相を紹介しようと思うが、十八年については資料があまり多くないため、四十年の訪問に関する資料の記載内容からの推測に基づいた叙述がやや多くなることをあらかじめ断っておきたい。

一 明治十八年の藝備訪問

① 東京から神戸、大阪、岡山へ

十五年五月ごろから十七年末にかけて東海道・北陸道、さらには北海道の函館にも足を延ばす大旅行を終えた後、しばらく東京に戻っていた王治本は、翌十八年の七月に至るや、今度は鎮西、すなわち西海道に向けて旅立つことにした。この時の彼の旅は、七月七日の東京での送別会の席上、亀谷省軒（一八三八―一九一三）が王詩に次韻して詠んだ詩が「知君特地停吟杖、耶馬溪頭夕照中（知る

君たちまち吟杖を停めん、耶馬溪頭 夕照の中）」という二句で結ばれているのと、海路神戸に渡った後大阪で再会した小川果齋（一八五三―一九一六）もその送別詩の最後を「想君載筆過耶馬、万壑千巖入卷来（想う 君 筆を載せて耶馬を過ぎなば、万壑千巖 卷に入りて来らん）」の二句で締めくくっているのを見ると、西海道の中でも特に豊前の耶馬溪が、当初から王治本の最終的な目的地となっていたようである。しかし彼が耶馬溪に足を踏み入れるのは、二年後の二十年五月か六月のことであった。

大阪を離れた後の彼の行方を追ってみると、現在のところ、十八年は備前↓備後↓安藝↓周防の各地に、十九年は土佐↓伊豫↓周防の各地に、二十年は長門↓筑前↓筑後↓肥後↓豊前（耶馬溪）↓讃岐（小豆島の寒霞溪）↓清国浙江省慈溪（郷里。第一次帰省と見られる）の各地に、それぞれその足跡を確認することができる。

つまり、十八年の藝備訪問はそのような二年近くにわたる西国大旅行の一コマを成すものだったのである。さて、大阪を離れた後確認することのできる彼の最初の足跡は、八月八日の岡山到着である。十八年八月九日の『山陽新報』に次のような記事が載っている。

王治本氏 十ヶ年許り以前より我国に渡來し東京に於ては詩文書を以て學者間に知られたる王治本氏が漫遊として昨日來岡し直ちに本社を訪ひ左の稟告を委嘱したり

清国公使館游學員王治本号漆園於昨初八日來遊岡山寓岡山区西山下●柏木如蒙屬書并撰改詩文等乞爲周旋

彼が身を寄せた柏木如蒙なる人物については未詳である。また、彼が岡山でどの程度の活動を行ったのか、徴することのできる資料は今のところ全く見つからない。

② 備後にて

その後、彼は備後地域に足を踏み入れ、この年の九月二十五日には尾道にいたことが確認できる。それは今から四十数年前、王治本の足跡について大規模な調査を行ったさねとうけいしゅう氏が目睹した、川村雨谷（司法官かつ南画家。一八三八〜一九〇六）の蘭の画幅に王治本の賛があり、その為書きが「乙酉中秋後二日題於玉浦、泰園逸士」であつたというのに拠る。玉浦は尾道の雅名の一つである。

ところで、文部省退官後西国へ旅をした依田学海（一八三四〜一九〇九）が二十四年五月八日、尾道の浄土寺の後山で見かけたという王治本の句は、このときの揮毫ではなからうか。『学海日録』同日の条に次のようにある。

今朝もまたきのふの如く数幅の書を揮ひ、終りて橋本石腸・竹斎とく浄土寺に遊び、祥雲楼にのぼりて海をのぞむ。この楼は本地絶勝の地にして、諸島よく見ゆ。茶菓の供あり。浄土寺

の後山を琉琉峯と名づけた。〔中略〕衛鏗生の句に琉琉峯浸水晶宮の句あり。又、琉琉無障碍、水月共光明といへる王漆園の句も見えき。

文中に見える衛鏗生も当時日本に滞在して各地を回っていた書家である。ただ、このとき王・衛の兩人が同行していたとは限らない。琉琉峯（標高一七八・八m）は現在は一 Generally 浄土寺山と呼ばれている。筆者は二〇一二年六月二十九日、実地踏査を行ったが、王漆園の句なるものを発見することはできなかった。

さて、学海の案内役を務めた橋本石腸（一八六二〜一九二四）は、頼山陽（一七八〇〜一八三二）や女流画家平田玉蘊（一七八七〜一八五五）の「友でありスポンサーのインテリ豪商」であつた橋本竹下（一七九〇〜一八六二）の孫橋本吉兵衛の別号である。吉兵衛については、『尾道市史』に次のような説明がある。

橋本吉兵衛 諱は徳清、字は子純、海鶴と号す。（中略）文久二年（一八六二）九月十三日の生れ、学を宇都宮竜山にうく三十年の頃貴族院議員に選ばれ、六十六銀行頭取、尾道商業会議所会頭等尾道経済界の重鎮なり。大正十三年（一九二四）八月十一日六十四歳にして歿す。慈観寺に葬る。

後に引用する『中国新聞』四十年九月八日号掲載の「奉和 漆園王先生『鶴湾懷古』詩韻」という作品から考えると、この十八年の王治本尾道訪問時に交流があつたもののようである。鶴湾も尾道の雅名の一つである。

備後での事としてはもう一件、二十五年十一月十八日出版の藤井葦川（一八三九―一八九二年三月）の『葦川遺稿』^{（遺稿）}九丁掲載の作「一月一日訪石井氏席上賦似主人」に対する「清国王泰園」の頭評がある。藤井葦川は、名は乾、森太郎と称し、葦川はその号。備後山手村（現福山市山手町）の人。葦川とともに江木鰐水（一八一〇―一八八一）の塾（福山藩校誠之館のことか）で学んだ五十川汎堂（一八三五―一九〇二）の『葦川遺稿序』によれば、葦川は「志を得ず、村学の師と為り、晏然として自得し、教授を以て任と為す。此れ其の心たる、富貴に眷恋たらざる者の若し」とあり、終始故郷を離れなかった人のようであるから、王治本との接触は十八年の彼の備後通過時と見るのが適当だろう。何らかの形で両者の接触があったことになる。

葦川は、備後の大先輩詩人菅茶山（一七四八―一八二七）の『黄葉夕陽村舍詩』所見の人物についての注解である『葦詩葦川註』をものした人であり、彼の注解は森鷗外（一八六二―一九二二）の作品「北条霞亭」において「黄葉夕陽村舍詩欄外書」等と称し、言及されている。

③ 安藝竹原

さねとう氏は、前述の調査時、当時広島大学教授であった頼桃三郎氏から、「松老花香風月地 頼詞契大雅属、時乙酉孟冬」（右）「天云海瀾水雲郷 瀬東王治本書」（左）と揮毫した二枚の書幅の写真を提供されたという。また、さねとう氏はその際の頼氏からの手紙の文面も次のように紹介してくれている。

同封写真ごらん願います。小生の父俊直（文久三年生）などが

款待の中心となり、後日王氏がスパイ嫌疑あるため、警察へ呼ばれたりしたなどの珍事があつたように書いております。

この聯は現在竹原春風館に蔵しておりますが、尚その節の執筆作品が、その他の家、亀田氏などにもあるかも知れません。

ただ、頼氏が王治本の竹原への立ち寄りを十八年十月ごろとされたのは、やや不正確である。なぜなら王治本を含め、当時の来日清国人は時日を記すには清暦に拠るのが通例だったからである。「乙酉孟冬」は十八年の十一月七日から十二月五日までの間に当たる。

さねとう氏はその後、竹原の名家亀田治夫氏（元竹原町収入役）所蔵の王治本筆「江山樓記」の写真八枚も入手し、その書幅の「原物は高さ二五・七センチ、ながさ四・五四メートル、文章七一四字という大きなもので、竹原の景勝と亀田氏の別荘のことが書いてあ」ったという。

④ 安藝広島

王治本は竹原訪問からさほど日を置かずして広島へと移動したようである。広島で彼と交流したことの実確なのは、橋本海鶴、すなわち吉兵衛とも交友関係のあった河野小石（一八二三―一八九五）である。小石の行実については、安井息軒（一七九九―一八七六）の外孫で一高教授であった安井朝康（一八五八―一九三八）の「小石河野先生碑」から抜粋して引用しておくことにする。

君諱徴、字文獻、号小石、又規庵、広島人、家本商估、（中略）十二歳父友桐陰（中略）勸入頼聿庵門。（中略）尋聘倉橋島敬長館教授。文久三年擢為儒員、始称河野姓、列士班。（中略）

明治二年兵部省徵君託戰史編纂、以母老辭、為巖島祀官、師範學校教官。皆不久而罷、開家塾授徒弟子數百人（以下略）（君は徵を諱とし、文献を字とし、小石、又は視庵と号し、広島の人なり。家は本商估なり。（中略）十二歳 父の友桐陰（中略）勸めて頼事庵の門に入らしむ。（中略）尋いで倉橋島敬長館の教授に聘せらる。文久三年 擢でられて儒員と為り、始めて河野姓を称し、士班に列せらる。（中略）明治二年 兵部省 君を徵して戦史の編纂を託するも、母老いたるを以て辞し、巖島の祀官、師範学校の教官と為る。皆久しからずして罷め、家塾を開きて徒弟子數百人に授く）

十八年の面会時、小石は王治本よりも一回り年長の六十過ぎであつた。『小石先生遺稿』巻下には王治本との交流を示す作品が三首残っている。その一つ。

暮秋清人王治本来訪、賦贈

禹迹茫茫四百州 禹迹茫茫たり 四百州
東吳西蜀足周游 東吳西蜀 周く遊ぶに足る
怪君遠渡滄溟水 怪しむ 君 遠く滄溟の水を渡り
閑過扶桑十度秋 扶桑十度の秋を閑過せるを

題の「暮秋」は漠然と陽暦の十一月ごろを言っているのだろう。あとの二首は、当時広島鎮台軍医長として在勤していた長瀬時衡（二八三六―一九〇一）の住まい「水楼」での宴集時の作である。

長瀬氏水楼宴集、次治本酌重贈之

醉倚高樓俯碧湾 醉いて高樓に倚り 碧湾を俯す
興清不覺在城闌 興清くして 覺えず 城闌に在るを
夕陽影澹明秋水 夕陽 影澹くして 秋水明らかに
微雨声寒失晚山 微雨 声寒くして 晚山失す
弧矢欲酬驚壯志 弧矢 酬いんと欲して 壯志に驚き
雲竜難逐愧衰顔 雲竜 逐い難く 衰顔を愧ず
神交一段忘言処 神交一段 言を忘るる処
付与酒杯絃索間 付与せん 酒杯絃索の間に

王治本の「壮志」とは、日本全国踏破の志をでも言うのだろうか。

疊韵再贈

垂垂身老鯉城湾 垂垂として身は老ゆ 鯉城湾
足跡何曾出闌闌 足跡 何ぞ曾て闌闌を出でん
却自天涯得奇客 却つて天涯より 奇客を得て
宛如雲表見名山 宛も雲表に名山を見るが如し
論詩時苦殊方語 詩を論じては 時に苦しむ 殊方の語
酌酒且開游子顔 酒を酌みて 且く開かん 游子の顔
相对忽悲離別近 相对して忽ち悲しむ 離別の近きを
魂迷台嶺鑑湖間 魂は迷わん 台嶺（清国浙江省の天台山）鑑湖（同省紹興城西南の湖）の間

備前国御野郡長瀬村（現在は岡山市北区に属す）出身の「水楼」の主も静石と号し、「資性鋭敏にして才思あり、業餘書を読み、手、

巻を離さず、儒仏に涉り、造詣すること深し、詩書俳句を好み、音楽歌舞亦その妙諦を得る」というほどの人物であつたから、このとき何らかの唱和をしたことが十分に想像可能であるが、その作は伝わっていない。

なお、偶然であるが、長瀬も鵬外とかかわりのあつた人物で、野末明氏によれば、鵬外は「明治一五、一六年頃執筆と推定される『語彙材料』に医学・漢学について長瀬から教えを受けた形跡があり、明治二二年『衛生新誌』に発表された『航西日記』は、『鵬外森林太郎著静石長瀬時衡評』で、長瀬の頭評と跋が付されている。(中略)鵬外とは、医学面、漢学面で、交渉の深い人物であつた」。

その他、王治本が十八年の広島訪問時に会つていたと見られる人物を以下に挙げておこう。

保田二橋(一八四三―一九一九)。玉井源作『広島県人名事典 藝備先哲伝』によれば、「諱は茂生、二橋と号し、八十吉は其通称なり。(中略)明治維新後広島に第四百四十六国立銀行の設立せらるゝや、其頭取として市の経済界のために尽し」た人物で、江戸時代前期から続く、当時広島きつての資産家であつた。広島市内の比治山の中に二橋の別荘である可楽園があつた。四十年に同園を訪れた王治本は「可楽園記(保田氏別荘)」という文章を書き残している(『中国新聞』四十年十月二十日。後掲)が、その中に「余憶昔游、従主翁之招、曾飲於是園。回首已二十餘年。而山林如旧、風物依然。唯當時賓朋、半皆雲散。独主翁与余、尚幸健存、得以重晤」という言葉がある。この「二十餘年」前というのは、明治十八年のことと見て差し支えないだろう。

小島範一郎(一八五二―?)。『中国新聞』四十年九月八日号に篠

水小嶋範の「清客王治本先生來游有詩、次韻賦贈」詩が載り、その尾聯に「二十星霜重邂逅、出門倣聽履声輕(二十星霜 重ねて邂逅す。門を出でて聴くを倣ふ。履声の軽きを)」とある。「二十星霜」が概数であれば、十八年の事ということになる。三田商業研究会『慶応義塾出身名流列伝』によれば、小島範一郎は「広島藩士小島岩之進の長男にして嘉永五年三月を以て生」まれ、「明治四年天下の形勢に鑑みて洋学の必要を感じ、(中略)上京し英書を学」び、慶応義塾に入學したもの、一年有餘にして父親の病氣により六年五月帰省し、同年六月広島県庁に入り、十一年五月からは広島属官として庶務会計の事務に従つていた。河野小石とも交流があつた。

脇本鵬波(一八三七?―一九〇七)。当時広島には風月吟社(後述)というものがあつたが、その盟主山田十竹(一八三三?―一九〇二)から「社中の領袖」と推賞された脇本鵬波が、王治本の広島再訪直前の四十年七月二十六日に急逝した。まもなく広島を訪れた王治本の「丁未秋孟重游鯉城、哀輓脇本鵬波先生、追次其遺稿中『玉浦一笑亭』詩韻、並希冥鑑(丁未秋孟 重ねて鯉城に游んで、脇本鵬波先生を哀輓し、追つて其の遺稿中の『玉浦一笑亭』詩の韻に次し、並びに冥鑑を希う)」と題する詩が、『中国新聞』四十年九月十七日に載り、その首聯が「憶曾結識鯉城陬、回首光陰去若流(憶う 曾て結識す 鯉城の陬、首を回らせば 光陰 去ること流るるが若し)」となつてゐる。王治本は、ほぼ同年齡の脇本鵬波とも十八年に会つてゐた可能性がある。脇本鵬波は、名は讓吉。もと広島藩士。風月吟社社友であつた伊藤篤城(一八六四―一九三六)の追悼文によれば、「明治維新の際広島県大属に任ぜられ、八年九年文部省修史局に在り、十年浅野男爵家の家政に参与し、十三年県の勸業吏と

なり、廿九年明道中学の教官に任じ、三十四年より浅野侯爵家の家譜編纂に従事^(主)していた。

広島を去った王治本は、十八年の年末ごろの時期、柳井の商家小田伴輔(号滴翠、一八六二―一九四三)の屋敷に滞在していたが、この事を含め王治本の周防訪問については別稿を参照されたい。

二 明治四十年の藝備訪問

最初の広島訪問から二十二年後の四十年、新春を清国で過ごした王治本は五度目の来日をし、細かな経緯は不明だが、ともあれ初秋のころ広島を訪れた。すでに古希を迎えた老人となっていた。広島滞在時の王治本と広島の人たちの詩が、当時の『中国新聞』に載っている。ここでは主としてそれらを資料として詩文交流の様子をたどってみることにする。但し、筆者が利用した同紙のマイクロフィルム(広島県立図書館所蔵)には、不鮮明で判読しがたい部分が少なくなかった。そこで、遺憾ではあるが、一字でも判読できぬ字が含まれている作品は、本文を引用せず、詩題のみを示すことを原則とする。

①『中国新聞』明治四十年九月八日に載る詩会

『中国新聞』に載る王治本と広島文人たちとの詩会の最初は、九月八日号所載のものである。筆頭に上述の橋本海鶴の詩が載っている。ここでは全文を掲げることにしよう。

奉和 漆園王先生「鶴湾懷古」詩韻 海鶴 橋本徳清 尾道
天涯倦客感新秋 天涯の倦客 新秋に感じ

重上江楼説昔游	重ねて江楼に上り 昔游を説く
水榭歌殘夢猶在	水榭 歌殘して 夢猶お在り
山陽笛歇涙空流	山陽 笛歇きて 涙空しく流る
飄蕭鬢髮枯如鶴	飄蕭たる鬢髮は 枯れて鶴の如く
浩蕩煙波跡似鷗	浩蕩たる煙波は 跡 鷗に似たり
剪燭欲談廿年事	燭を剪りて談らんと欲す 廿年の事
酒間忍聽竹枝謳	酒間 聴くに忍びんや 竹枝の謳

この詩だけは、この後に続く詩と韻が異なり、作者の住まいも広島ではなく尾道である(注記もされている)ことからして、あるいは王治本が広島の前に尾道に立ち寄り、その際に唱和したものかとも考えられる。

この詩の後に掲載されている四首の七絶は、同席者同士の唱和の作であることが明らかである。韻字はいずれも征、城、盟、觥、輕。唱和の次第を整理してみると、まず王治本が「再入鯉城」と題する詩を高田守天に贈ったものと見られ、以下、次のようになる。

守天高田似壠「漆園王治本先生被似『再入鯉城』作、次韻賦贈」
詩(王治本への贈詩)↓王治本「答守天高田君見寄、仍用前韻」
詩(守天高田似壠への答詩)↓篠水小嶋範「清客王治本先生來游有詩、次韻賦贈」詩(王治本への贈詩)↓鴛城伊藤謙「広陵再邂逅 漆園王先生賦贈、仍用被示詩韻」詩(王治本への贈詩)

高田似壠(一八五九―一九二八)は、王治本の「答守天高田君見寄、仍用前韻」第七句に「読律十年無枉法(律を讀みて十年 法を

枉ぐること無し」とあるように、司法関係の人物。稲田九皋（一八六六—一九三二）が大正九年十二月に書いた「送高田守天翁移住東都序」に「今者高田秋曹年六十」とあることから、生年を推定した。「広島の人にして、元 医家に生まれ、其の学を攻むるも、一旦飄然として法学に志し、（中略）東都に之き京阪の間を往来し、苦学勵行、年甫めて二十二にして、狀師に第し、爾來職に勉めて名望有り、屢しば辯護士会長と為り、時に或いは県市會議員と為り、正義を以て聞こえた」。増田修氏に明治から大正にかけての広島の代言人組合・辯護士会の沿革についての一連の研究成果があるが、その中に最も頻繁に登場する人物の一人が高田似壠である。元氣旺盛で、且つ多藝多才な人であつたようで、漢詩人としての雅号守天とともに、俳人としては白南とも号していた。

伊藤鷺城（一八六四—一九三六）は、呂山刊行会のホームページによれば、昭和五年ごろ、現在呉市に本拠のある楓社漢詩会の母体である「楓社」を作つた人物だという。このホームページの記載内容と古川隆次郎編『東広島商工会議所創立十周年記念企画 安芸・備後の国 絵画展』における略伝とを照合してまとめてみると、名は謙、字は大虚、通称三郎、号は鷺城。武蔵の国忍藩（埼玉県行田市）の出身であることにちなみ、雅号を鷺城とした。漢詩人、画家。儒教を佐藤牧山（一八〇一—一八九二）に、詩を大沼枕山（一八一八—一八九二）に学んだ。諸県を教授して回り、広島に住むようになった。南画をよくし、大正六年第二回広島県美術展覧会に出品、昭和六年無鑑査となり、詩書画ともに活躍し、多くの作品を残した。広島に住むようになったいきさつについては、彼自身の言葉に「明治三十七八年の役畢りて、飄然此地に來り」とあるのみで、それ以

上のことは不明である。

さて、その彼がこのとき王治本の詩に次韻して詠んだのは、次のような作品であつた。

広陵再邂逅 漆園王先生賦贈、仍用被示詩韻

不期琴劍又孤征 期せず 琴劍もて 又孤征きしならんとは

昨会既城今鯉城 昨は既城に會し 今は鯉城

老驥猶存千里志 老驥には猶お存す 千里の志

白鷗空逐五湖盟 白鷗は空しく逐う 五湖の盟

扶桑勝蹟全歸筆 扶桑の勝蹟 全て筆に歸す

渤海鄉愁或上觥 渤海の郷愁 或いは觥に上らんか

疇昔投吾縞紵贈 疇昔 吾に投じて縞紵をば贈りぬ

至今拾襲未敢輕 今に至るも拾襲し 未だ敢えて輕んぜず

詩題にある通り、鷺城も王治本との「再邂逅」ではあつたが、彼の場合、前回の邂逅は既城、すなわち群馬県の前橋においてなのであつた。それはいつの事であつたかと言えば、上掲の王治本の「答守天高田君見寄、仍用前韻」詩に対する評の中で、鷺城が「僕不読先生之詩者、實十二年于茲」と述べていることから、二十八年ごろであつたことが分かる。筆者のこれまでの調査では、王治本は二十七年暮春、日光を訪れているから、その頃足を延ばして前橋をも訪れたものかと推察される。また、この詩の第四句は、鷺城が王治本よりも三十歳ほど若い、いまだ四十過ぎの年齢であるにもかかわらず、己の広島での暮らしを隱遁めいたものとして捉えていたらしいことを窺わせる。

二人は広島で、かつて前橋で唱和した詩に疊韻する形式での唱和も行っており、その際の王治本の作の方は『中国新聞』四十年九月十七日に載っている。

鴛城詞台疊旧「厩城唱和詩」韻賦贈

琴書共作広陵游 琴書 共に作す 広陵の游
尚有吟篇篋底収 尚お吟篇の篋底に収むる有り
遷謫多愁同李白 遷謫せられて愁い多きは 李白に同じく
遙追有賦擬莊周 遙追して賦する有るは 莊周に擬す
狐王廟外秋聞笛 狐王廟外 秋 笛を聞き
猫子橋頭夜放舟 猫子橋頭 夜 舟を放つ
一笑相逢容似旧 一笑して相逢う 容 旧に似たり
風流才調本溫柔 風流なる才調 本溫柔なり

第三句は鴛城のこの時の境遇を表現したものと見られ、上述の隠遁めいた暮らしとのつながりを感じさせる。

②「広陵雜詠十六首」のことなど

王治本は当時の広島の名所等を詠んだ「広陵雜詠十六首」という作品（『中国新聞』四十年九月十七日）を残している。不鮮明な個所の含まれていない計九首を紹介することにしよう。

一、 三月東風草木香 三月 東風 草木香し
公園游履一時忙 公園 游履 一時忙し
旧侯遺沢甘棠樹 旧侯の遺沢 甘棠樹
探勝争登臥虎岡 勝を探って争って登る 臥虎岡（臥

二、 号令森嚴細柳營 虎山公園（註）
頻勞戎馬事西征 頻りに戎馬を勞して 西征を事とせしむ

三、 山陽重鎮軍容壯 山陽の重鎮 軍容壮んに
鼓角声々旧鯉城 鼓角声々 旧鯉城（広陵軍鎮）
桂花香裏近中秋 桂花香裏 中秋近し
有客吹簫夜倚樓 客有り 簫を吹き 夜 樓に倚る

五、 明月滿天猿唳徹 明月 滿天 猿唳徹り
猿肱河上泛扁舟 猿肱河上 扁舟を泛ぶ（猿猴河泛舟）
明月樓頭酒滿瓢 明月樓頭 酒 瓢に満ち
玉人低唱念奴嬌 玉人低く唱う 念奴嬌

八、 只較楊州少一橋 只楊州に較べ 一橋少なきのみ（廿三橋）
曉來洗沐試紅粧 曉來洗沐して 紅粧を試み
有約同行得意郎 約有りて同行す 得意郎

九、 偏是美人工媚態 偏に是れ美人は 媚態に工なり
狐王廟裏去燒香 狐王廟裏 去きて燒香す（狐王廟）
篠水川頭暮漲潮 篠水川頭 暮れに潮漲る
東西兩岸幾条橋 東西兩岸 幾条の橋
層樓歌管扁舟月 層樓の歌管 扁舟の月
浪擲千金買一宵 浪に千金を擲ちて 一宵を買う（三篠川）

十、 南枝独占百花春 南枝独占す 百花の春

不是山崖即水濱
試問尋梅何處好

是れ山崖ならず 即ち水濱
試みに問わん 梅を尋ぬるは 何れ
の処か好からん

芒鞋布襪到饒津
十二、憶從別後淚霑胸

芒鞋 布襪 饒津に到る(饒津看梅)
憶う 別れしより後 涙 胸を霑し
しを

隔絶長橋路万重
願効銀河牛女約
年々到此一相逢

長橋隔絶し 路万重
願わくは銀河牛女の約に効い
年々 此に到りて 一たび相逢わん
(相逢橋)

十四、十畝新開插蠟田

霜濃月白味正鮮
拾來爭向街頭売
割取車螯半殼円

十畝新たに開く 蠟を挿うる田
霜濃く月白くして 味正に鮮し
拾い來りて 争いて街頭において売る
車螯を割り取れば 半殻円かなり
(蠟田)

残りの七首は鶴羽根神社(東区二葉里)の紅葉見物を詠んだ第四首(鶴翼山觀楓)、広島の数々の料亭を詠んだ第六首(廿四樓)、第七首(絵馬橋)、猫屋橋を詠んだ第十一首(猫兒橋)、江波を詠んだ第十三首(衣波江)と、場所は明示されていないが仏護寺(中区の本願寺広島別院)を詠んだ第十五首、花柳街を詠んだ第十六首である。

以上の一連の作に対して、駕城は、

蓋此郷、●有頼杏坪竹枝詞、近有山県適処等『広陵雜詞』、風

月吟社有竹枝詞、而此十六首實為其殿者也、(中略)広島市得之、頼為鼎呂之重也矣。

との評を付けている。彼の言う頼杏坪(一七五六―一八三四)の「竹枝詞」は『藝南江村竹枝』全十四首のことで、主として藝南の漁村の風俗を詠じたものである。一方、山県適処(名篤藏。一八三七―一九〇六)等の『広陵雜詞』(山県篤藏、十四年一月)とは、山口出身の彼が広島に在任時、江山吟社のいずれも「羈旅之客」たる同人たち―それぞれ六石・聴松・秋濤・樸宇・麻磧・蟻窠・春及と名乗る七人―と「跡を茲に寄すること年有り、花光月色、水態山姿、目に触れて心に感じ、口もて啜い手もて題し、積みて一百篇を得て、輯めて小冊子と為し」たものである。風月吟社(後述)の「竹枝詞」は未見である。

③ 風月吟社のことなど

これまでに何度か出てきた風月吟社について、その社友のことを中心に、あらためてここで取り上げておこう。『中国新聞』四十年九月二十六日号と二十七日号には「風月吟社席上課題(観月)」と銘打って、いずれも「中秋夜泛」と題する王治本・和知霜谷・小嶋篠水・伊藤駕城の計五首が載っている。この年の中秋節である陽曆九月二十二日に、詩の内容からして、三篠川に舟を浮かべ宴会を開き詠んだものと推察される。

十八年の王治本との交流後の小嶋篠水の経歴は、前掲の『慶応義塾出身名流列伝』によれば、

十九年八月広島県御調世羅郡長に任ぜられ在職五年にして、二

十四年兵庫県川辺郡長に転じ高等官五等に陞叙せらる、在職三年病氣を以て辞職し故山に起臥するに及び特旨を以て正七位に叙せらる、是れ氏の官人生活の終りなり。其後三十三年伊藤公の政友会を組織せらる、や藝備両国の政友会幹事に推選せらる、三十四年に至り大に思ふ所あり、断然政友会を脱して実業界に入り（以下略）

となる。

ここで初めて登場した和知霜谷、名は葵一郎は、稲田九臯の「賀和知霜谷孺人古稀叙」によれば、中津藩士の子として生まれ、「成人に及んで、陸軍に出仕し、累進し」た人である。明治初期の官員録に徴してみると、筆者が調べた範囲内では、十年、十一年には「中尉 歩兵科 兼裁判中主理 従七位」、十二年には「大尉 歩兵科 兼議定官 従七位」、十三年から十七年までは「東京鎮台 副官歩兵大尉 正七位」となっている。二十六年広島山中文華堂版の関貫一述『小学外篇講義』第壹号に「正六位霜谷和知先生」という肩書での題辞があり、三十一年十二月刊の本人編『餐霞集』に「正六位 和知霜谷 中津人寓広島」とあることから、その後「正六位」に昇進したこと、広島で暮らすようになっていたらしいことが知られる。三十二年十一月十九日に記された上述の稲田九臯の文章では「累進至現職、方在閑地、令奉養有餘、誠謂賢子矣」となっているから、まだ何らかの職位があったのだろうが、十分に母の孝養ができるだけの余裕のある職務だったようである。その人柄は、九臯によつて「君資性敦厚、鍊武攻文、旁善詩書、接人溫藉。其在家奉上、亦宜想也（君は資性敦厚にして、武を鍊り文を攻め、旁ら詩書を善

くし、人に接するに溫藉なり。其の家に在りて上を奉ずることも、亦宜しく想うべきなり）」と評されている。なお、支那憲兵隊司令官として昭和二十年の終戦を迎え、戦犯容疑で巢鴨拘留所に拘留された和知鷹二（一八九三—一九七八）はその次男である。

『中国新聞』四十年十月十二日と十五日には「風月吟社宿題」として「安倍仲麿」の題で王治本・稲田九臯・和知霜谷・熊見曲水の四人の作が載っている。このうち、古希を越えた王治本が宿題に依じて、他の三人をはるかに上回る長さの七言三十二句の詩を作っているのは、壮観と同時にやや奇異な感じもするが、老境を迎えての彼の大度を示すものかもしれない。

ここで、稲田九臯と熊見曲水について触れておかねばなるまい。稲田九臯については、『鶴鳴軒詩文鈔』所収の「履歷自述」に次のようにある。

稲田斌、字士讓、通称康太、号九臯又竹南、旧姓高木、備中高屋人。（中略）慶応二年十一月念八日生。（中略）有故出贅稲田氏。卒郷校之後、受經学文章于阪田警軒・山田十竹・菊池三溪・五十川汎堂諸儒、学詩賦于藤井葦川・嵩古香諸先生。（中略）獲小学校及中等学校教員免許状、歴職于広島県師範学校広島県立広島商業学校修道中学校修道中学校広島高等師範学校。（中略）大正十四年乙丑歳首

備中高屋は、広島との県境に近い現岡山県井原市高屋町。上述の五十川汎堂・藤井葦川や、風月吟社の盟主山田十竹との師承関係も述べられている。

ところで、九阜の『鶴鳴軒詩文鈔』には王治本の次のような題辭が載っている。

徂徠太宰古称賢

徂徠〔荻生徂徠〕 太宰〔太宰春白〕 古 賢と称せり

歎絶風流数百年

風流 歎絶して 数百年

誰把文章鳴盛世

誰か文章をば盛世に鳴らさん

一如僂鶴唳長天

一に僂鶴の長天に唳くが如く

詩壇文陣少兼才

詩壇 文陣 才を兼ねるもの少なし

独有山陽衆妙該

独り山陽〔頼山陽〕の衆妙を該める有るのみ

此後驪珠誰拾得

此の後 驪珠 誰か拾い得ん

九皋著作出新裁

九皋の著作 新裁を出せり

丁未秋九重遊鯉城

題鶴鳴軒詩文鈔為

九皋詞兄雅属

彰園老人王治本時年七十有三

第一首は、『詩経』小雅「九阜」を出典とする九阜という雅号とその作品集の名称に込められた本人の意図を代弁してやったような趣が読み取れるものである。

熊見曲水は、その名は定次郎、曲水と号し、手島益雄『広島県人名事典・附録 広島県先賢伝』よれば、「新聞記者であつた。且つ地方の歴史に審かにして、「飽微光萃録」の如きも曲水の筆になるものである。志を得ずして、世を去つたが、地方的文士として有名

なる人であつた」というが、曲水には「広島に於ける新聞紙」という談話の記録があり、その中で一部言及している自身の経歴によれば、「政党を組織し」たり、「広島県立中学校へ奉職」したりもしている。また、高田守天との親密な関係も窺われる。

さて、以上のようなメンバーを含む風月吟社は、上述の通り、山田十竹を盟主とするものであつたが、彼の『十竹軒詩鈔』に二十五年のものとして「寄人勸為風月吟社員代柬」や「篠江泛舟 風月会席上」の作があることからして、遅くともそのころまでには成立していたことになる。四十年の王治本との交流に参加した人々は、橋本徳清以外は皆この吟社の社友だつたと見られる。この吟社の実態についてはなお詳細な調査が必要だが、王治本が来広する直前の『中国新聞』四十年八月十五日掲載の「七夕（風月吟社）国泰寺小集課題」に作品が載っている人物としては、他に中川空老・灘尾可峰・頼古梅・三角蒲軒・三村羅風・高田●南がある。

灘尾可峰（名晃寿。一八六八？）は仏教学者南条文雄（一八四九—一九二七）著『軍人演説』（二十八年）の編輯兼発行人であり、広島市銀山町徳栄寺の住職。また、三十八年八月と三十九年九月に白雲庵社（住所は「広島市銀山町徳栄寺内」）からそれぞれ出版された『征露祝捷詩第一編』と『凱旋餘光』の編者を務めている。自身がこの吟社を主宰していたと考えられるが、この二つの詩集には和知霜谷・小島篠水・脇本鷗波・伊藤篤城らの作品も掲載されているから、吟社の結成や加入はかなり自由に行われていたようである。頼古梅（煤）（一八六六—一九三一）は元緒が名で、通称弥次郎。頼山陽の曾孫であり、聿庵（一八〇一—一八五六）の孫。広島市南区比治山町の多聞院境内にある古梅の墓の碑文（東京帝国大学教授

文学博士塩谷温題額）によれば、古梅は十三歳のときから七年間京都で族父について学んだ後、広島に戻った。師山田十竹が創設した修道学校の教鞭を十竹の没後、執るようになり、三十一年に陸軍地方幼年学校が開設されると、その助教にも拔擢され、以後、両校で講授するようになったという。三角蒲軒（一八五九^{（注可）}）は、三十一年五月五日発行の『東洋哲学』第五編第五号「詞林」に大久保湘南（一八六五—一九〇八）の「送三角蒲軒之九州八首、其巡察地方略具乎詩中節録」と題する作品があることからして、地方巡察関係の仕事をしてた人物かと見られるが、それ以上のことは未詳。中川空老は、その名を朝三郎といったことだけ判明している。^{（注可）}高田●南は、もし白南なら、高田の俳号だが、そのようには見えない。三村羅風は全く不明。いずれも今後の調査に待ちたい。

④ 鶴仙園にて

『中国新聞』四十年九月二十八日と二十九日には、和知霜谷宅、すなわち鶴仙園での詩会で詠まれた作品が掲載されている。詩会のあらましを追ってみることにしよう。まず鴛城が「贈霜谷軍門和知大人」と題する詩を霜谷に贈り、次に王治本がこれに次韻した「訪鶴仙園即席次韻」詩を鴛城に贈っている。王治本はさらにこれに疊韻した、次のような詩を霜谷に贈っている。

贈鶴仙園主人再疊韻

王治本

閨尽煙波百感空

煙波を閨し尽くして 百感空しく

帰来逸興寄焦桐

帰りに来りて 逸興 焦桐（琴の名）に寄す

松間置局逢樵子

松間 局（棋や将棋の盤）を置きて 樵子（き

こり）に逢い

月下敲詩学島公

月下 詩を敲きて 島公（唐の苦吟詩人賈島）に学ぶ

老圃幽花含宿雨

老圃（古い庭園）の幽花 宿雨を含み

旧時宝剑挂屏風

旧時の宝剑 屏風に挂く

將軍意氣真橫絕

將軍の意気は 真に横絶

都付把杯一笑中

都て付す 杯を把りて一笑する中に

そしてこれを承けて、鴛城が「秋夕同 漆園王先生「訪鶴仙園再疊韻」と題する詩を霜谷に贈っている。

⑤ 風月楼にて

『中国新聞』四十年十月二日と十月十三日には小島篠水宅、すなわち風月楼での詩会で詠まれた詩が掲載されている。詩会のあらましを追ってみることにしよう。まず王治本が「篠水小島君招飲、賦贈用其壁上所掲余十年前題一笑亭詩贈」と題する詩を篠水に贈っているのだが、この題の内容に従えば、王治本は三十年ごろ玉浦（尾道）の一笑亭で詩を題したことになる。また、篠水がそのとき同席していた可能性も出てくる。筆者がこれまでに収集した資料にはこれらの事実を裏付けるものがない。今後の調査において留意したいと思う。さて、その後は、

小島篠水「丁未秋夕招

漆園王先生於寓楼、分韻奉賦贈」（王

治本への贈詩）↓伊藤鴛城「風月楼招飲、与王大人同賦」（王

治本への贈詩）↓三角蒲軒「篠水小島君招飲、限韻賦贈」（小

島篠水への贈詩）↓和知霜谷「同」（小島篠水への贈詩）

と進み、次に王治本が「風月楼小集重疊前韻」と題する次のような詩を詠んでいる。

策杖橋頭得々行

杖を橋頭に策きて 得々〔擬音語〕として
行き

満天星斗喜新晴

満天の星斗 新たに晴れたるを喜ぶ

渾同伏驥甘終老

伏驥〔雌伏した良馬〕の老を終うるを甘んず
るに渾同じ

肯傲寒飈叫不平

肯えて寒飈〔冬の大風〕に倣いて 不平を
叫ばんや

涉水登山尋樂趣

水を渉り山に登りて 樂趣を尋ね

栽松種竹遣閒情

松を栽え竹を種えて 閒情を遣る

樓名風月無冬夏

樓は風月と名う 冬夏無し

謝絕塵縁不復縈

塵縁を謝絶して 復たは縈わざれ

そして最後は鴛城の「夜飲多興、重疊前韻、明日有游可樂園之約、七八故及」と題する次のような詩が全体を締めくくっている。

衆星此夕向奎行

衆星 此の夕べ 奎〔文章をつかさどる星〕
に向かいて行く

高閣凌霄万尺晴

高閣 宵〔宵の誤りか〕を凌ぎ 万尺晴れ
たり

燈下白華迎客盞

燈下の白華は 客を迎えて澄い
欄前の秋水は 杯と平らかなり

詩非百鍊纔言志

詩は百鍊に非ず 纔かに志を言うのみ

酒過三蕉已飽情 酒は三蕉〔三杯〕を過ぎて 已に情に飽きぬ
明日輞川応趁約 明日 輞川〔王維の別荘。可樂園をなぞらえた〕
応に約に趁くべし

吟衫未許一塵縈 吟衫 未だ許さず 一塵の縈るをも

この詩の尾聯に述べられている約束に従い、翌日詩人たちは可樂園へと出かけたのであった。

⑥ 王治本「可樂園記」

十八年に王治本と会ったときは四十過ぎだった保田二橋も、今や六十代半ばの老人となっていた。二十一年には黄綬褒章を賜り、三十三年には正七位に叙せられ、その名望はますます高くなっていた。その二橋の比治山にある別荘が可樂園であった。王治本も述べている通り、春畝、すなわち伊藤博文（一八四九―一九二七）も二十九年にここを訪れ、「可樂園詩、并序」という漢詩作品を残している。風月吟社の文人たちと王治本との交流の跡を追ってきた締めくくりとして、可樂園を詠んだ彼の見事な四六駢儷体の作品（『中国新聞』四十年十月二十日）を紹介しよう。

可樂園記（保田氏別荘） 王治本

鶴見橋東岸有山、横亘於猿肱川上。古称比治山、今日臥虎山、取其形似也。山中有古堞、有公園、林泉深奥、山峰秀拔、誠遊樂之勝地焉。当虎岡西麓、峰巒忽作一壑、是勝中之尤勝也。有屋数椽、為保田二橋翁別墅。別墅之中有堂、有樓、有廂房、花木叢深、蹊徑曲折、又有一池、適在山坳之下、巖泉瀉落、水声滴滴、如奏琴筑。登樓一望、樓前綠野廻環。間有村舍、多是

樵夫野老之居。村外則揚倉山、吳霜山、石屋山、如排闥、如挿笏、高下爭奇、遙翠若接。左則有小赤壁馬耳山之勝、右則為廣陵市街、篠水濛濛、皆歷々可望。樓後傍山。即以山徑為園徑、可登可涉、可坐可臥、唯意是適。「蘭亭記」曰、「一觴一詠、足以暢叙幽情。洵可樂也」。園曰可樂、蓋取於此。余憶昔游、從主翁之招、曾飲於是園。回首已二十餘年。而山林如旧、風物依然。唯當時賓朋、半皆雲散。独主翁与余尚幸健存、得以重晤、把酒談旧、不亦賞心之樂事乎。且聞春畝相國西游、曾假作行窩、有題額、有吟句、一時唱和甚衆。苟非山林可樂、与主翁之歎客多情、烏能使巨公名士咸來游賞也哉。雖然、余謂、山林之樂、要亦在人之自取者耳。昔司馬有園、曰独樂、康節有窩、曰安樂。固不論其園圍若何、台榭若何、唯其心中、自有樂趣、（七字略）況此園、占林巒之勝、饒幽適之情、春而賞花、花可樂也、夏而浴水、水可樂也、秋而觀月、月可樂也、冬而聽雪、雪可樂也、昼而弄琴、琴可銷憂焉、夜而讀書、書可娛志焉。吾觀主翁年近古稀、蒼頭白髮、矍鑠猶如壯時、知其中必能悟樂天之旨、得樂道之真、乃能身心俱泰、齒德弥高。主翁而有是園、主翁能得是樂。庶幾斯園也、当与司馬之独樂、康節之安樂、並垂千古也。是為記。

（鶴見橋の東岸に山有り、猿肱川の上に横たわり亘る。古比治山と称し、今は臥虎山と曰う、其の形似たるに取るなり。山中に古堞〔古い垣〕有り、公園有り、林泉は深奥に、山峰は秀拔にして、誠に游樂の勝地なり。虎岡の西麓に当たりにて、峰巒忽ち一坳〔平たい所〕と作る、是れ勝中の尤も勝れるところなり。屋数椽〔幾棟かの家屋〕有り、保田二橋翁の別墅たり。別

墅の中に堂有り、樓有り、廂房有り、花木叢がり深く、蹊徑曲がり折れて、又一池有り、適に山坳〔山間の平地〕の下に在り、巖泉瀉ぎ落ち、水声滴瀝として、琴筑を奏するが如し。樓に登りて一望すれば、樓前 緑野廻環せり。間に村舎有り、多くは是れ樵夫野老の居なり。村外は則ち揚倉山、吳霜山、石屋山、園〔門〕を排ぬるが如く、笏を挿すが如く、高下 奇を争い、遙翠 接するが若し。左には則ち小赤壁馬耳山の勝有り、右は則ち広陵市街たり、篠水濛濛せり、皆歴々として望む可し。樓後は山に傍えり。即ち山徑を以て園徑と為し、登る可く渉る可く、坐す可く臥す可く、唯意に是れ適う。「蘭亭記」〔晋の王羲之の所謂「蘭亭集序」〕に曰く、「一觴一詠、以て幽情を暢叙するに足る。洵に樂しむ可きなり」と。園を可樂と曰うは、蓋し此に取るならん。余憶う 昔游びて、主翁の招きに従い、曾て是の園に飲しぬ。首を回らせば已に二十餘年なり。而れども山林は旧の如く、風物は依然たり。唯當時の賓朋は、半ばは皆雲散しぬ。独り主翁と余とのみ尚お幸いにも健存し、以て重ねて晤い、酒を把りて旧を談るを得たるは、亦賞心の樂事ならずや。且つ聞けり 春畝相國西游せしとき、曾て仮りて行窩〔好みに応じて設けた部屋〕と作し、額に題する有り、句を吟ずる有り、一時唱和甚だ衆かりきと。苟くも山林の樂しむ可きと、主翁の客を歎すこと多情なるとに非ずんば、烏くんぞ能く巨公名士をして成來りて游賞せしめんや。然りと雖も、余謂えらく、山林の樂しみは、要するに亦人の自ら取る者に在らんのみ。昔司馬〔宋の司馬光〕に園有り、独樂と曰い、康節〔宋の邵雍〕に窩有り、安樂と曰えり。固より其の園圍の若何、台榭の若何を論

ぜず、唯其の心中に自ら樂趣有り、(七字略) 況や此の園は、林巒の勝を占め、幽適の情饒かにして、春にして花を賞すれば、花 樂しむ可く、夏にして水に浴すれば、水 樂しむ可く、秋にして月を觀れば、月 樂しむ可く、冬にして雪を聴けば、雪 樂しむ可く、昼にして琴を弄すれば、琴 憂いを銷す可く、夜にして書を讀めば、書 志を娛しましむ可し。吾 主翁の年古稀に近く、蒼頭白髮なるも、矍鑠たること猶お壮時の如きを觀て、其の中に必ず能く樂天の旨を悟り、樂道の真を得たればこそ、乃ち能く身心俱に泰く、齒德弥いよ高きことを知る。主翁にして是の園有り、主翁能く是の樂しみを得たり。庶幾くは斯の園や、當に司馬の獨樂、康節の安樂と、並びて千古に垂るべけんことを。是れを記と為す)

王治本がいつまで広島に滞在したかは不明だが、県内島嶼部の豊田郡大崎東野の人、宮本神峯(一八三三—一八九八)の『我々螺山人遺稿』(呉市山手通四十七番次六番地宮本正貫編輯兼発行、四十二年)に王治本の「丁未小春月中浣彩園老人王治本。讀于呉江旅邸」との讀が記されており、一部頭評もある。「丁未小春月中浣」は四十年十一月十六日から二十五日の間に当たる。その頃には呉に移動していたことになる。三十一年に亡くなった神峯の長男、正貫(一八六〇—一九一二)が何らかのついで王治本と接触し、執筆を求めたのであろう。

おわりに

以上、明治十八年と四十年の二度にわたる王治本の藝備訪問とその間に行われた地元文人との詩文交流の様子を紹介した。

次稿では、二十年の九州・小豆島訪問を取り上げ、今回と同様、地元文人との詩文交流の跡を追ってみたい。

注

- 1 以下、本稿の本文では見出し等、一部の箇所を除き、「明治」の年号は省略することにする。
- 2 亀谷省軒『次韻王泰園留別作』、『熙朝風雅』第六集(明治十九年)所収。
- 3 小川果齋「乙酉夏日、重晤清客王泰園、話旧、兼送其游鎮西」、『熙朝風雅』第七集(明治十九年)所収。
- 4 『山陽新報』は岡山県立図書館所蔵のマイクロフィルム資料を利用した。マイクロフィルム資料等において不鮮明で判読できない字を、以下●で示すことにする。
- 5 なお、王治本が名乗る「清国公使館游学員」というのは正式なものではない。後に引用する頼桃三郎氏の手紙にも見える「スパイ嫌疑」等、余計なトラブルを避けるため、このような架空の肩書を冠したものと想像される。
- 6 さねとうけいしゅう『近代日中交渉史話』(春秋社、一九七三年)所収「王治本の日本漫遊」二二七、二二八頁。原載は『武蔵野女子大学紀要』一九六九年三月所収の「王治本の日

- 本漫遊記録」。
- 7 学海日録研究会編『学海日録』第八卷（岩波書店、一九九一年）二四六頁。
- 8 蔣海波「明治前期東亜文化交流の一側面―漢詩人水越耕南の交友を中心に―」（『関西文化研究叢書12』『東アジア三国の文化―受容と融合―』所収、二〇〇九年）。
- 9 池田明子『頼山陽と平田玉菫』（亜紀書房、一九九六年）二一七頁。
- 10 青木茂編『尾道市史』中（尾道市役所、一九四〇年）八〇三頁。
- 11 『葦川遺稿』の編纂者は広島県備後国芦田郡府中市村百拾番邸鶴岡耕雨・同六拾五番邸 後藤虎吉、印刷者兼発行者は同百五拾三番邸 高尾寛六。
- 12 『葦川遺稿』所収。
- 13 ただし、鷗外は「その九十二」冒頭（岩波書店昭和四十八年刊『鷗外全集』第十八卷三七頁）ではその名を「藤川葦川」と誤っている。
- 14 さねとう氏前掲書二二四頁。
- 15 さねとう氏前掲書二二五頁。
- 16 さねとう氏前掲書二二六頁。なお、広島県賀茂郡河内町出身の栗原朋信氏（当時早稲田大学教授）が、実家に伝わる「神泰定」の三字が大書せられ、「靈府不揺神泰定放翁句也。古川君大雅属、渚東、王治本」という為書きのある書をさねとう氏に見せてくれたが、揮毫の年が書かれていなかったという（さねとう氏前掲書一八八頁）。
- 17 例えば河野小石の『小石先生遺稿』（岡崎壮太郎編、河野達一発行、一九三四年）巻下に「帰路過尾道、橋本海鶴邀余天画楼、日暮港口泛漁舟納涼、分風字同賦、偶末松局長西下、海鶴与之有旧、一揖而別」と題する明治二十七年の作がある。これはもと饒津公園にある「小石先生碑」の碑文を写したものであり、『小石先生遺稿』所収。
- 18 岡山県編『岡山県人物伝』（岡山県、明治四十四年）二四二頁。
- 19 野末明『康成・鷗外 研究と新資料』（審美社、一九九七年）中の「長瀬時衡と森鷗外」。
- 20 玉井源作『広島県人名事典 藝備先哲伝』（歴史図書社、一九七六年）五三五、五三六頁。
- 21 この一節の訓読は本稿末尾を参照されたい。
- 22 三田商業研究会『慶応義塾出身名流列伝』（実業之世界社、明治四十二年）六九九・七〇〇頁「大日本軌道会社取締役小島範一郎氏 広島市西地方町三一」の項。
- 23 『小石先生遺稿』巻下に「送小島篠水赴任摂州」と題する詩がある。これは小島が明治二十四年、兵庫県川辺郡長に転じる際の送別詩である。
- 24 伊藤篤城「嗚呼脇本鷗波翁逝けり」（『中国新聞』明治四十年八月十四日）。
- 25 伊藤篤城同前。
- 26 王治本の小田家滞在については、山口県文書館副館長金谷匡人氏及び小田伴輔のご令孫小田善一郎氏のご指示による。別稿は「王治本の周防訪問および地元文人との文藝交流」と題するもので、『武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編』第六

十卷(二〇一三年三月)に掲載予定。

28 王治本の日本における足跡の概略については、拙稿「明治期滞日清国人王治本と地方の漢詩人たち」新潟の事例を中心に「(東アジア日本語教育・日本文化研究)第十五輯所収、二〇一二年」四頁を参照されたい。なお、北海道立図書館所蔵の「閑理堂資料」により、王治本は三十九年の秋から冬にかけての時期、札幌に滞在していたことが判明した。この事を補足するとともに、今後その詳細を究明したい。

29 この「被」の字は語法上、不要である。和習の一種。

30 「被示詩韻」は和習と言わざるを得まい。「原韻」とでも表現すべきところ。

31 稲田九臯著、高田似壠編輯兼発行『鶴鳴軒詩文鈔』(教育彰功還暦祝賀九臯会、一九二五年)所収。

32 稲田九臯「送高田守天翁移住東都序」。

33 増田修「広島代言人組合沿革誌 附・広島始審裁判所の官許代書人」(『修道法学』第二十八巻第二号、二〇〇六年)、同「広島弁護士会沿革誌 (1) 明治編 附「代書人取締規則」(明治三六年広島県令第一〇二号)に基づく代書人組合」(『修道法学』第三十一巻第一号、二〇〇八年)、同「広島弁護士会沿革誌 (3) 大正編」(『修道法学』第三十三巻第一号、二〇一〇年)。

34 増田氏「広島弁護士会沿革誌 (1) 明治編 附「代書人取締規則」(明治三六年広島県令第一〇二号)に基づく代書人組合」二七〇頁。

35 book.geocities.jp/rozanshisho/kanshika.html

36 古川隆次郎編『東広島商工会議所創立十周年記念企画 芸・備後の国 絵画展』(芸備絵画研究会、一九九九年)一二頁。

37 前掲伊藤鷺城「嗚呼脇本鷗波翁逝けり」。

38 前掲拙稿「明治期滞日清国人王治本と地方の漢詩人たち」新潟の事例を中心に「四頁」。

39 二葉山山頂にある広島東照宮金光稲荷神社のこと。

40 現在の本川橋。明治三十年に鋼トラス橋に改築され、永久橋化された。

41 現在の比治山公園。

42 後で言及する明治十四年刊の江山吟社の『広陵雜詩』にも「二十三橋」という表現が三か所見られる(第六十五・六十七・九十九首)。当時広島市中の橋の数は二十三とするのが常套表現になっていたらしい。

43 現在広島市東区にある饒津神社のこと。

44 現在は「相生橋」と表記されている。

45 『広陵雜詩』所収の山県適処の作の結句に「歌沸紅欄廿四樓」とあり、その原注に「酒樓有二十四」とある。

46 上引の「猫子橋」と同じだろう。

47 現在は「江波」と表記されている。広島市中区。

48 筆者が調べた範囲内では、山県篤蔵は『明治十年十一月 官員名鑑 全』(神崎正誼編、山口安兵衛他発行)と『明治十二年二月 明治官員録 全』(大崎清重編、山口安兵衛他発行)では広島県の二等属に、『明治十一年五月 官員録』(日暮忠誠編、拡隆舎)と『明治十三年十月 改正官員録』(彦

根正三編、博公書院)では広島県の一等属に、それぞれその名が見える。

49 『広陵雜詞』叙。

50 『慶応義塾出身名流列伝』七〇〇頁。

51 稲田九臯「賀和知霜谷孺人古稀叙」(『鶴鳴軒詩文鈔』所収)。

52 明治十年から十三年までの官員録については、注48を見られたい。同十四年から十七年までの官員録は、それぞれ『明治

十四年七月 改正官員録』(彦根正三編、博公書院)、『明治

十五年五月 改正官員録』(同前)、『明治十六年十二月 改

正官員録』(同前)、『明治十七年五月 改正官員録』(同前)。

53 明治二十八年七月四日の『中国新聞』広告欄に長男実葬送後の会葬御礼が載っている。この頃にはすでに広島に住んでいたことが知られる。

この「令」の字は語法上、不要である。和習の一種。

54 詳細は今後必要があれば、また究明することとして、とりあ

えず参考までに明治二十九年四月十二日の『中国新聞』の記事を挙げておく。「和知中佐の着任 元第一軍司令部附陸

55 軍歩兵中佐和知葵一郎氏は第五師団附を命せられし処一昨十日着広昨十一日より出務せり」。

稲田九臯「賀和知霜谷孺人古稀叙」。

56 手島益雄『広島県人名事典・附録 広島県先賢伝』(歴史図

57 書社、一九七六年)八十八頁。ちなみに、「飽微光萃録」とは、

備(薇)讃瀬戸西部の塩飽諸島に関する著作ではないかと推

察される。

「広島に於ける新聞紙」、『尚古』に第二年第十一号(明治四

十一年二月)から八回に分けて連載。

59 『十竹軒詩鈔』(紀本翠窓出版兼編輯、一九三〇年)。

60 その他、灘尾可峰については藤木潺溪編『広島県人物評伝統

編』(宝積肇、一九二五年)三一六―三一八頁に簡略な評伝

がある。

61 三角蒲軒の生年を一八五九年としたのは、『百花欄』十二集

臨時増刊(明治三十七年)所載の「百欄千家」に安政六年生

62 稲田九臯の明治四十年以後の作にも『送三角蒲軒之仙台』と題するもの(『鶴鳴軒詩文鈔』所収)がある。

63 壬戌後遊会編『壬戌後遊会誌』(壬戌後遊会、一九二三年)の「壬戌後遊会出席名簿」に「大手町八丁目 空老 中川朝三郎」とある。

64 玉井源作前掲書五三六頁。

65 伊藤博邦編『春畝遺稿』(伊藤博文公伝記編纂会、一九三〇年)所収。

66 宮本正貫については新庄輝夫編『藝南古今人物誌』(藝南新聞社、一九六六年)一九三頁。

67 『我々螺山人遺稿』には、明治二十八年に死んだ河野小石の頭評もある。小石を介してのつながりの可能性もある。

(しばた・きよつぐ本学教授)